

き替えることに等しい。

サンディカリズムは、諸々の産業部門の管理を、……党に属さない異なる生産に分割された労働者大衆に任せるものである。……

もしも労働組合、すなわち十分の九を占める党外労働者が、……産業管理を指示するならば、党は何の役に立つのか。」

(一九二一・一・一九「党の危機」)

III D・A・デ・サンティリヤンの

絶対自由共産主義の

科学的概念

アントニオ・エロルサ

一九三二年以来、ディエゴ・アバド・デ・サンティリヤンが提唱してきたプログラムは、アナキズムの諸前提と計画経済との困難な調和に役立つことのできる、全国レヴェルでの経済組織化の計画を指すものであることは明白である。彼は、アナキズムとは資本主義や人間の支配を物の管理に代えることであるという考えを出発点としている。そしてこういう。「だが、何をもって国家にとって代えるべきなのか。この問題はいつも耳にしているし、われわれ自身もそれを提起している。人間による人間の支配を事物の管理に代えなくてはならないと。」

この考えの発展が、サンティリヤンにおいては、産業と地域という二つの本質的な軸から出発する連合主義組織に帰着し、この

組織は工場評議会から「社会主義経済全国評議会」へとつながり、計画化の中心機関となるべきものである。

雑誌「新時代」の一九三四年五月五日付初号でサンティリヤンは、資本主義の発展自体が、特に「私的資本主義の本質的要素である」経済的個人主義と両立し得なくなり、計画化の必要を示している」と主張し、結論的にこうつけ加えている。「だが、もし新計画経済が国家官僚の活動ではなく、労働者大衆と技術者の活動から直接出発するならば、われわれは目標に大いに近づくことになるであろう。」……技術の発達には、アナキズムの諸計画自体の条件および制限をなし、それを考慮しないすべての計画を実行不可能にする。経済生活は調整の方向に向っており、個々の経済主体の下す決定の役割は重要さをますます失いつつある。それと言及はしていないにせよ、この立場は『自由コミューン』のごとき概念に基づくあらゆる理論的計画の拒否を意味する。生産者の個人的な好みは現代の経済では、例えば職人の生産におけるほどの影響力をもたない。……これは確かに残念なことであるが、現代の生活においては実際に起っていることであって、われわれは生活の主体者となり、それを直接管理しなければならぬ。このような現実に対して、経済の一般的傾向に多少対応する考えではなく、われわれを宿命的に少しでも職人的生産に引き戻すような労働のタイプを対立させることは、砂漠で説教し、狂人を気どるものであらう。

従って、少くとも革命の第一段階においては、社会主義化された経済の統一的指導を承認することが必要である。

『プログラムを欠くアナキズム』の擁護者たちに反対するサン

テイリヤンの態度は、その後いつそう強固になる。彼によると、革命状況の下では形而上学的な諸著作から抜け出し、もはや一連の否定のみをこととしないことがより緊急となる。そのような態度は、不可避免的に自発性主義と大衆との擁護に帰着するからである。これに反して当面の仕事は、革命とその目標に対して科学的態度をもつことであり、国家と資本主義とが統制する体制の中で自己の経験に取りかかることは不可能であるから、革命の変革が起るべき社会についての十分な知識を基にして、行動に導くような仮定を打ち建てることである。「アナキズムは、現存社会組織に反対して新社会秩序の必要を確認する思潮および社会勢力を表わすものである。この新事態の確認は、現存秩序の否定を意味するし、われわれは現に否認している。しかし、現実の制度および觀念に対する否認の態度は、われわれが永久の否定の中に閉じこまることを意味しない。われわれが破壊を欲するのは、まさに建設を熱烈に望むからである。われわれが自由な結合、発意の精神、平等および連帯の否定を象徴する資本主義と国家とを批判するのは、人間が自己の運命と自己の努力の所産との主人であり得る社会形態を目指しているからである。……」

それ故アナキズムのプログラムとは、アナキズムの本質的諸觀念の基本的要求——永遠の「精神的」要求——を一定の社会状況の現実に適応させることであるといえよう。アナキズムは、いくつもの経済体制と両立し得る要請である。これに反して、共產主義は豊かさを基礎としてのみ可能である。従って絶対自由共產主義の実現も、この前提条件実現のあとのことである。そしてこれは、現代技術の諸制約に適応することを意味する。こうしたこと

は、革命後の社会における自由な実験の客観的限界となる。技術は、経済体制の調整と内部統一の度合が増進することを意味し、これらの要因は地域的経済単位から本質的に生起する革命的展望なるものすべてを排除する。サンテイリヤンはこう要約する。「現代産業は固有のリズムをもつメカニズムである。人間のリズムが機械のリズムを決定するのではなく、機械のリズムが人間のリズムを決定している。革命が廃絶するのは工場の私有制である。しかし工場は存続し、私見ではさらに完成されなければならないものとすれば、その作業の条件を知らなくてはならない。社会的所有制への移行は、生産の本質や方法を変えはしないのだ。……しかも理解しなくてはならないのは、工場は固有の生命をもつ孤立した組織体ではないことである。それは工場や地域の枠や地方を越え、しばしば国境をも越えた複雑な装置の一片だということである。地域の枠を軸とする経済観（局地主義）は、すでに古物博物館にしまいこまれたか、まだそうでないところでもそうなるにちがいない。」

かくして社会発展の中での技術レヴェルの自主性は、絶対自由主義革命が避けることのできない経済的諸条件を押しつける。第一に、生産および分配の一切の力を結集することが、革命の第一日から実現されなければならない。これに反して経済的《局地主義》が引き起こす分断化は、当初から人々の最も基礎的欲求に対する充足を保証することは不可能であると言おうとするものである。

経済的《局地主義》の批判は、不可避免に自由コミュニケーションの否定になる。自由コミュニケーションは、ただ公共生活（連合組織の一部であ

ることを要する)管理の見地から、ある有効性を保持するにすぎない。しかし、経済の見地からすると、社会結合の本質的な核は労働の場であって《類縁集団》ではないという事実を考慮しないコミュニケーションの考えは、実際には一般的窮乏に帰着する時代おくれの考え方にすぎないからである。

「リベルテール思想界には、ある混乱が広く行われているように見える。そこでは、共同生活、類縁集団および経済機能が明確に識別されていないからである。過去の諸ヴィジョン、アルカディア(桃源境)や自由コミュニケーションの夢が今もある同志たちの心に影響をおよぼしている。しかし、アルカディアは過去のものであり、将来の条件はそれと全く異なっている。われわれが工場に求めるのは類縁関係、結婚、友情、一般社会におけるような友誼ではない。……工場における共同生活の基礎は、性格の近似ではなく労働や専門的能力の質である。これを要するに、社会生活において形成される類縁集団は経済生活にはいかなる機能をも営んでいない。《自由コミュニケーション》とは、類縁集団という考えの論理的帰結である。しかし、経済においては自由コミュニケーションなど存在し得ない。ここでは自由は、同時に独立を語るものだからである。だが独立のコミュニケーションなど存在し得ない。政治的および社会的見地から共同体内部の物事を絶対の最高者として規制する手段としての自由コミュニケーションと、経済の見地から見た自由コミュニケーションとはきわめて異なるものである。この点でわれわれの理想とするものは、革命が起った一国または数ヶ国の経済全体の網に結合し、連合し、統合したコミュニケーションである。」

現代経済の進歩は《局地主義》ではなく、諸々の経済活動の可

能な限り広大な調整を基にして行われる。従って資本主義と国家とを廃止することこそは、人類のあらゆる技術的可能性の眞の発展を可能ならしめるのである。サンティリヤンのアナキスト的ユートピアは、イサク・プエンテやフェデリコ・ウラレスのような理論家たちが無視した問題、産業社会の諸問題に対する回答としてリベルテール共産主義とは何かを解決しようとする努力である。「われわれは安楽(物質的満足)を欲するのか。それならそれが意味するすべて、産業経済装置を受けなければならない。それとも物質的満足に固執しないのか。そのときは、自由コミュニケーションすなわちコミュニケーション段階の経済の旗を掲げることができる。無支配はそこで実現されるかも知れないが、物質的満足は獲得されないであろう。物質的満足は経済的統一が完全に行われ、われわれの有する技術的科学的知識、近い将来に増大する知識のすべてを強度に応用する体制の下でのみ獲得されるであろう。」

これから一月あとサンティリヤンは、アストウリアスの革命的事件(一九三四年一〇月、左派諸勢共同の蜂起)を省察して、《自由な実験》の本来の場合すなわち政治をそこに見出したと思った。彼によると、アストウリアスではスペイン労働者階級の支配的な三つの傾向が存在した。ある人々は小規模の社会主義共和制を、他の人々はソヴェト的共和制を建設し、またほかの人々は《リベルテール共産主義》の規範に従った。その結果労働者勢力の間にそれぞれの方式に対する相互の寛容と共同の敵に対する闘いとに基づく一致の可能性があることが示された。プロレタリアートの、また異なる社会主義建設さえその内部で様々の見解が共存することは、それ以来サンティリヤンが擁護するアナキズムの科学的性格を示

する証左、また現在スペインで活動している労働者の種々の党派および組織の問題に対する一つの解答と見なされている。そして彼は、自己の見解をまさに『科学的』であると主張してドグマ的に強要しようとするマルクス主義の科学性なるものを批判し、これに応酬する。「もし社会主義が本当に科学的であつたなら、それは自由な実験に有利なもう一つの理由であつたろう。自由な実験こそは社会主義の生産力、真理性および正しさを証示する唯一の方法だからである。……われわれは、社会主義や将来社会についてのあらゆる見方は仮説であると思う。人々が欲するだけの社会主義観があり得るけれども、問題はこれら仮説を試して見ることでしかない。」従つてアナキズム運動を一層イデオロギー的に同質たらしめようとする要求には、問題はあつたにせよ労働運動における方途の多様性に対する要求がつけ加えられることになる。サンティリヤンは、調整の要求を組織の領域に、見解の一致を体制の全体的社会主義化に関する一連の基本的問題点に限ることに、また『自由な社会的実験』の原則を満たし得る補足的組織の多様さを認めることによって、誤解をさけようとする。あらゆる努力の調整を目指して協力するに当つてアナキストが主張する唯一の前提条件は、これこれの傾向のために用いられる強制権力が一切存在しないことである。

サンティリヤンは、経済計画と政治計画との分離をくりかえし説いている。アナキストは革命においてすべての労働者勢力に協力する用意をしており革命後の社会においても様々な方式の共存を認めるが（アナキスト自身、社会主義者が彼らの議会を保持するのを認めようとしている）、アナキストをも他の者のモデルに

従うよう強制しがちな一切の国家的強制は直ちに排除しなければならない。内戦当初の数ヶ月間は、労働者勢力間の善意な理解の名の下に、このようなスローガンが掲げられるであらう。ソヴェト共産主義の失敗は、ある社会主義概念をドグマ的に強制するすべての企てを待ち構えている結末のシンボルである。又多元的な見解こそは、最大の力をもって発展するであらう（ひろく戦術上の理由で）。「われわれは、新秩序への同感の度合を必ずしも同一としない数多くの組織が共存し得ることを認める。……今と同じく各工場においてわれわれは様々な政治的世界の中で働き、そこでわれわれに関心をもつ労働者はむしろよき職業人であり働き仲間であつて、われわれと理念を共にする者ではないであらう。

……スペインには多くの労働者組織が存在する。それらはすべて経済再建に寄与すべきであつて、すべてがそこでそれぞれの役割を果たすことができなければならない。革命は、この面ではあらゆる寄与を拒んではならない。しかし他の面、万人の万人のための作業であるべき生産と等しい分配との領域以外では、各自が己れのよしとする生活形態を選択するであらう。かくしてわれわれは、宗教的信仰を抱く人々には信仰を保持し、これを公に誇示する権利をも否認しないし、社会的見解を共にしない人々にも彼ら自身の立場が攻撃や他の人々をそれに従わせようとする意志を含まないという当然の条件で、その立場を擁護する自由を拒まないであらう。」こうした立場は、内戦最中にも擁護されるであらう。しかし、アナキズム運動自体について見ると、真の革命プログラムを作成し社会主義建設がいかにあるべきかに関する本来の仮説を提示することがますます必要になる。「特定の知的および道

徹底的理由のために、またわれわれが将来企図する行動のために、われわれは経済的、政治的および社会的計画に関するわれわれの立場の基礎に具体的形態を与えなくてはならない。」そこでサントイリヤンは、アナキスト著作家たちの常套的なヴィジョンにまさるレヴェルで、これら諸問題全体に関する見解を作成すべきCNT経済研究所を創設することを提唱した。

その機会は一九三六年二月、人民戦線政府がCNTの活動の再開を認めたときに訪れたように見える。……それ以来CNTは、労働組合の活動の自由と政治犯の釈放を要求し、その反政治、反選挙の立場を喚起した。しかし、反選挙闘争は一九三三年一月の闘争におけるような暴力を惹起しなかった。サントイリヤンは「新時代」誌で棄権は革命的でも反革命的でもないことを指摘した。しかし、この時期にCNTにとって主要な問題は、臨時大会を召集することであった。大会は共和制下の5年間のCNTとアナキストたちの活動のすべてを批判し、政治体制と労働運動自体の変化に応じて今後の行動方針を決定しなければならなかった。これについての本質的な問題は、対立する労働組合の再統合、UGT（社会党系労働組合）との革命的同盟、《リベルテール共産主義》に対するCNTの立場を確定するにあった。……

大会日程の第八の議題は、《CNTの絶対自由共産主義観》であった。「われわれはとくに他の諸問題の重要性を否定しようとするものではない。しかしこの問題が大会の取上げる諸問題の中で最も重要であるといわなくてはならない。」……しかし、機関紙「労働者連帯」三月二十七日の社説は、絶対自由共産主義は《純連合主義》でしかなく、その基礎は自治体または自由コミューン

によって構成されるという伝統的な見解をくりかえすにとどまった。……

大会の成行を見通してサントイリヤンは、一九三六年三月にその『革命の経済組織』を出版し、二年間にわたるいくつかの論文や「新時代」社説で擁護してきた立場を約説した。その基本的内容は、従前の文章で示されたものと同じである。すなわち、技術の進歩は機械が人間にとって代る事態をもたらし、このことは資本主義の枠内では世界的に慢性的失業を惹き起す。私的所有は富の集中、国家の抑圧、これに伴う大衆の貧困を意味する。資本主義の下で生み出された技術の可能性は、経済社会主義のあとでのみ十分に利用されることができる。最後にこの社会主義化組織の形態は、生産方式の技術的必要に適應しなければならない。

ついで、先に述べたのと同じ警告が見られる。「もし、もはや不可能な経済的原始主義に戻ろうとするのではないならば、われわれはすべての生産要素の最大限の調整を実現する、生産者および消費者自身による生産と分配の直接管理体制を目ざさなくてはならない。これこそはわれわれをして資本主義経済の本質にはるかに優越せしめるものである。……だが、指導的原理として決定的に踏み越えるべき何かがあるとすれば、それはまさに経済的局地主義である。今日の経済は、もはや一国のまして地域の枠内に閉じこめることはできない。問題は、作業集団内での個人の、労働組合内での作業集団の、産業部門評議会内での労働組合の、等々の、時効にかかることのない自由と同じように不可欠な、経済体制の指導管理に当る一般的機関の創設とを両立せしめ得ることである。簡単にいえば、問題は自主管理（順次に連合した各集

団の」と中央の機関からする調整・計画とをいかにして整合するかにある。」

組織の中核をなすものは工場評議会であって、これは従業員の選任によって労働者、事務職員および技術者から構成され、いつでも解任または変更することが可能である。工場評議会の代表者をもって職業または産業労働組合の諸部門を構成し、各部門の評議会から執行部（サントリーヤンの案では一〇名ないし七名）が構成される。また各部門評議会は地域評議会を形成し、この評議会の任務は本質上下部組織の調整にあり、これは「現行政治組織自治体、自治体議会等々にとって代る」ものである。その上部に地方評議会がある。これは信用・交換の審議会を附屬機関とし、この審議会の本質的機能は、統計資料を集め、公共事業、新技術の研究・応用をなしとげることにある。さいごにあるのが経済連合評議会である。これは一般的調整を領域とし、《部門別》の方向に陥りがちな下部段階の支配的影響力を抑える力として役立つべきである。その役割は、国家の即時的廃絶を意味する革命の際にも同様に本質的であるが、政治権力は問題にならない。「われわれの経済連合評議会は、政治権力ではなく経済的規制と公共生活管理との機関である。指示は下からくるのであって、評議会は活動にさいし地方評議会および全国評議会の決定を守らなくてはならない。それは調整の手段であって、それ以上のものではない。国際通商もこの評議会を通して行われる。」

経済連合評議会の任務は統計によって現実を知り、いかなる強制をも用いずしてこれこれの活動を助長する手段を講ずることにある。この新しい機関は権力をもたず、従ってアナキズムの原理

を尊重する。「経済連合評議会の活動に関しては、強制権力を用いるのは追求する目的に反する結果をもたらし、無効というよりむしろ不可能であるだろう。なぜならそれがもつ最高の權威は数字に、統計に属するからである。」この調整機関は、生産者および消費者の自由な社会の存立の保障であるにすぎず、その規制は連合を結成する各集団および組織の相対的自主性を尊重する計画化によって行われる。

こうした革新は、伝統的なアナキスト理論家たちの不信を招くにちがいない。かくて「レヴィスタ・ブランカ」誌が、サントリーヤンの提説反対の先頭を切ったのは何も驚くことではない。その主幹フェデリコ・ウラレスのサントリーヤンの著書批判での攻撃は間接的ではあったが、ルドルフ・ロッカーの序文に対してはコミュニケーションを基礎とする強烈に革命的で単純なアナキズム信条がくりかえされた。「われわれのアナキズムは」とウラレスは断言した、「コミュニケーションから地方さらに全国へと発展する。それは底辺から頂点へと、すべてを連合化するアナキズムである。われわれは大げさな表明も、大々的な中央機関も、大組織も、指導委員会の増大も信頼しない。われわれの好むアナキズムは、きわめて単純な、きわめて友愛的な、きわめて開放的であると同時にきわめて具体的なアナキズムである」。

ヘルミナル・エスグレアスの「レヴィスタ・ブランカ」論文も同様な意味のものである。彼は一切のプログラムの有効性を否認し、あらゆる経済的考慮をアナキズムの道德的基礎に従属させる。これは直ちに、計画化のあらゆる企てに対する個人とコミュニケーションとの擁護を意味する。「われわれは、地域と個人の努力によって

こそ現実のものとなる物事を、上部の組織や団体が実現するとは信じない。」「アナキズムは経済的教説ではない。……アナキズムは一切の経済的教説を越え、人々に至高かつ調和した総合、自由、生の建設的確認を提示し否定的原理たる権威・権力に対抗する。」結局「経済は理想の諸源泉を涸らすべきではない。」一九三六年四月一七日から「労働者連帯」紙に発表された各労働組合の諸報告は、《コミューン主義的》心性の強固さを立証した。……

CNTサラゴサ大会の第一九回会議は、「CNTの絶対自由共產主義観」に関する最終報告の討議に当られた。この報告を読みさえすれば、それが一五〇を数える他の報告よりも、バルセロナの製造業および織物業労働組合とフェデリカ・モンセニイの個人的活動の影響を多く受けていることを理解するに十分である。報告の概要は四月一九日の「労働者連帯」紙に発表されたが、その各ページ毎にいく分ひそかに取りいれられた古典的アナキズムの考え方への修正が見られる。……しかもそれは、「コミューン主義的」見解の全面的勝利を説き個人の主権を認め、自由コミューンこそは経済的行政的見地からして革命後の社会の本質的要素であるという。

この最終報告は、イサーク・プエントの小冊子「自由共產主義」の単なる転写にはかならなかった。実際にそれは、ウラレスがその小冊子「理想と革命」や「自由コミューン」で説いた立場、「闘争者」や「レヴィスタ・ブランカ」に拠るグループの守る路線をとるものであった。この路線によると「自由コミューンがいたるところに打ち建てられるときにこそ、われわれは新しい社会機構を運営することになるであろう。労働組合および労働の場に

集結した各部門または職業の生産者は、この労働がいかに組織されるべきかを自由に決定するであろう。」

生産組織の計画に当られた個所では、もっと一般的であると同時にもっと具体的な言葉でこう述べている。「(労働の場所、労働組合、コミューン、新社会の生活を規制すべきすべての機構において)基本をなすものは、生産者たる個人であり、個人こそは一切の社会的・経済的および道徳的創造の細胞、基礎を構成する。すべての工業生産組合、すべての農業生産組合は全国段階にまで連合を結成する。……われわれは、新しい社会は各コミューンに、最も自由な人間——ここではコミューン——は他者を最も必要とし、ない者であることを教える、生物学的原則に従って、その自主性を取得するに必要な農業および工業の諸要素をすべて漸次に保有することを可能にすると信じる。」

かくして最終報告は、産業社会の要求に対応し得る《絶対自由共產主義》の新しい定義を期待していた人たちを失望させただけであった。サンティリヤンは大会について書いた論文で、アナキスト闘士たちの立場を正しく示したはずのテキストにおける混乱を明らかにした。「テキストはすべての問題について、時には細かすぎるほど語っているが労働の組織にはふれていない。この最終報告は美辞麗句が多すぎ、われわれの予期しない矛盾やあいまいな個所が集められている。それは、大会の最も重要かつ有益な部分をなすべきはずなのに、最も貧困な、最も支持し難い見解を提出しているにすぎない。家族や軽犯罪や愛の嫉妬やヌード主義その他多くのことが語られているが、労働、労働の場所、生産組織について語る言葉はほとんど何も見出されない。」

報告では共産主義と《コミューン主義》とが絶えず混同され、特にコミューンの必要とする自主性、さらにその自給自足性が力説されている。これは、人間の自由はその独立の函数であるという《生物学的原理》に従っている。そのような確認は、一方では主張者たちの社会ダーウィン主義を、他方では彼らの現実性の欠如を示すものである。コミューンの経済的自給自足の有優性というこのテーゼは、われわれが到達した文明と文化との段階に対応する諸要求に対する歎かわしい誤解を立証する。最も自由なコミューンは最も孤立した自足のコミューンであると主張するとき、人は詩や文学の領域に入りこむことになる。

サラゴサ大会で採択された田園主義的ユートピアに反対してサントイリヤンが提唱するのは、絶対自由共産主義の科学的概念の基礎そのものとしての技術進歩、大産業である。結局サントイリヤンによると、かかるユートピア図式においてはコミューンが、資本主義社会において国家が果たすのと同様の役割を果たすことになるということができよう。「われわれは、もし労働の場所から出発するならば」とサントイリヤンは結論する。「これら自治コミューンに関することは何も無い。なぜなら自発的に生起するのは、産業および社会的に必要な諸機能に関する同じ目標を旨とする諸努力の局地的、地方的、全国的、国際的結合体である。こと経済に関しては、局地主義の幻想を追い放わなくてはならない。」

X

X

X

(七四頁より続く)

セバストポル航路の船員で共産主義者であるわれわれは、現在的情況について討論した後、次に続くような結論に達した。

「ここ三年来、われわれの党には、多くの運まかせの冒険家や利殖主義者たちが存在し、彼らは官僚政治と労働者・農民とは反対の相入れぬ性格の思想を意識的にとり入れることによって、国家を誤った方向へ発展させようとした。われわれの党は、労働者とプロレタリアート階級の敵に対する戦いの問題を常に設定してきた。本日、われわれは人民の誠実な子孫として、今後労働者とプロレタリアート階級の獲得物を守ることを公然と表明する。

われわれは、共和国がさしかかっている困難な時期に乘じ、明白にあるいは陰蔽しながらこの情勢を利用して白色擁護者を許さない。彼らは権力をソヴィエトから強奪することを望んでいる。われわれは、共謀国の反革命的な根絶し難いものに対し、必要な抵抗を対峙させることを知っている。われわれは、すでに表明したことで、労働者とプロレタリアートのソヴィエトの創設を提唱したクロンシュタット臨時革命委員会に続くことを新たに表明する。

労働者権力の唯一の擁護者、ソヴィエト権力万歳！

われわれはこの決議文が、出版物によって広く伝播されることを要求する。(二六名のサインが続く)

次の者たちによって、ロシア共産党からの脱党書簡が、われわれの下に送られてきた。(各人の職務と部署を記載した二四名のサインが続く。)